

合同カンファレンスを通して見えてきたもの ～合同カンファレンスの有用性～

3階西病棟看護科 森 直美 山口 祐佳 吉田 綾子

キーワード：カンファレンス・合同カンファレンス・医師と看護師・看護

はじめに

私たちの所属する3階西病棟は現在呼吸器科、糖尿病科、消化器科を主診療科とし、悪性疾患で入退院を繰り返したり、疾患の他にも、高齢等で第3者介入に関する退院支援が必要な患者が多い。

科によってカンファレンスの行われ方は様々ではあるが、医師、病棟看護師の他、理学療法士、栄養士、薬剤師、医療ソーシャルワーカー、外来担当看護師も参加しカンファレンスが行われ、患者の今後や現在の状況などを話し合うことでそれぞれが持つ情報交換の場となっている。また、朝の申し送りが終わった後のショートカンファレンスでは、看護計画の評価、修正、他スタッフが持つ情報の共有、加えた方がよいと思われる看護計画の抽出などの検討も行われている。

現在行われているカンファレンスが、実際に看護に役立っているのか、患者の問題解決に繋がっているのか、またカンファレンスのあり方を考えどのように役立てていくべきかを検討し、今後の患者ケアに役立てていきたい思いから今回のテーマを研究することとした。

I 研究方法

- ①研究期間：2009年6月1日～同年9月30日
- ②研究対象：3西病棟医師・3西病棟看護師・外来看護師・薬剤師・栄養士・理学療法士・医療ソーシャルワーカーの58名を対象に独自作成の質問紙を用いた量的調査を実施。また、各医療職より無作為に選出した14名に対しインタビュー調査を行った。
- ③データ分析方法：調査項目を単純集計し、100分率を用いた。また、自由記述及びインタビュー結果を一部抽出した。
- ④倫理的配慮：質問紙は無記名で行い、得られたデータは研究以外では使用しないことを書面にて説明。質問紙は研究者のみで扱い、終了後には破棄した。

II 結果

- ①対象職員58名 回収56名
- ②回収率97%（内有効回答率90%）
- ③アンケート結果

問1 あなたの職種は何ですか。（図1参照）

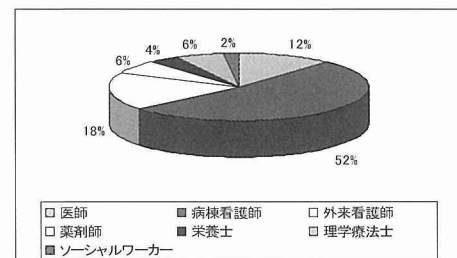


図1 アンケート対象者の職種

問2 合同カンファレンスに参加した経験がありますか。（図2参照）

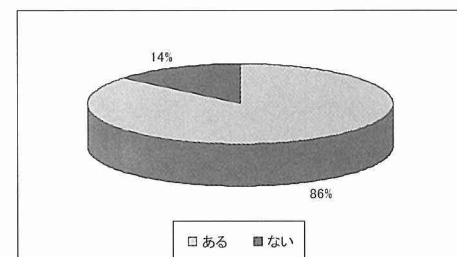


図2 合同カンファの参加経験

問3 当病棟での合同カンファレンスは必要であると思いますか。（図3参照）

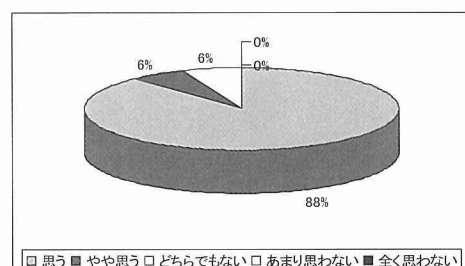


図3 合同カンファの必要性について

問4 合同カンファレンスが必要と思わない理由は何ですか。

問3で必要と思わないという回答がなかったため、この項目は回答なしであった。

問5 合同カンファレンスが必要と思う理由について。
全10項目に対して必要と思うか思わないかを回答してもらった。回答の詳細については表1を参照。

問6 合同カンファレンスは職種間の情報交換の場になっていると思いますか。(図5参照)

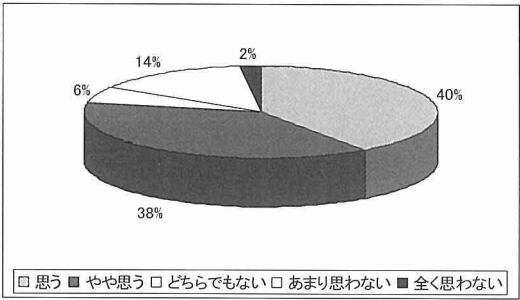


図5 情報交換となっているのか

表1 合同カンファレンスが必要と思う理由

	思う	やや思う	どちらでもない	あまり思わない	全く思わない
①患者の病状や治療方針が分かる	84%	14%	2%	0%	0%
②患者の思いを知りニーズに合った対応が出来る	64%	30%	2%	4%	0%
③チーム間での患者に対する認識のズレを修正できる	66%	24%	6%	2%	2%
④退院に必要な社会資源の調整が出来る	56%	32%	10%	2%	0%
⑤チーム医療の質が高まる	68%	24%	6%	0%	2%
⑥患者や家族のパーソナリティ・周辺状況などを知ることが出来る	64%	30%	4%	2%	0%
⑦振り返りの場になり、話し合いの中でアイデアや工夫が生まれる	66%	28%	4%	0%	2%
⑧他職種の意見を聞くことで視野が広がり、患者をトータルにとらえる事ができる	76%	18%	2%	4%	0%
⑨他職種との連絡調整の場になる	70%	18%	10%	2%	0%
⑩病院機能に唱われている	46%	26%	20%	6%	2%

問7 合同カンファレンスは患者の問題解決に繋がっていると思いますか。(図6参照)

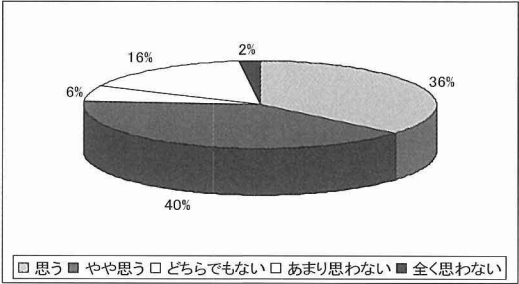


図6 問題解決に繋がっているのか

問8 インタビュー・アンケート自由記載結果

【知りたい情報】 <ul style="list-style-type: none">・職種の専門性に準じた事柄の情報を知りたいと考えている。(治療目標、緩和医療はいつからなのか。摂食状況、食欲低下の要因、身体機能目標、薬物の使用目的、内面的配慮、退院先、ケアマネなどのフォーマル、インフォーマルサービスの利用など)	【医師の意見】 <ul style="list-style-type: none">・患者の内面が把握できる・他のカンファレンスが重なると定例開催が難しいこともある。・患者がいない場での話し合いなので、医療者の一方的な判断で決めつけがでないようにすべき・経験知は対等のはずなので積極的に意見を述べてほしい。
【役立っていること】 <ul style="list-style-type: none">・患者の情報・治療方針が分かれば、今後の方向性が分かり指導しやすい。・他職種の情報が分かる。・患者背景が把握できる。	【要望】 <ul style="list-style-type: none">・患者の経過・治療方針は分かるが、患者紹介に留まっており患者の問題についてもっと討論したい。・各職種が必ず発言出来るような環境づくりが必要。・定期的な開催の継続。

Ⅲ 考察

①合同カンファレンス開催に対する認識
氏田1)は「質の高い看護を提供できる為には、多くの人の意見や見方が集約できるカンファレンスは必要不可欠のものである。」と述べている。
今回のアンケート結果でも「合同カンファレンスが必要と思う」「やや必要と思う」との回答は94%得られ、「あまり思わない」「全く思わない」の回答は0%であった。このことから、医療者にとって医師の治療方針を初め、その他の情報交換の場となるカンファレンスは行われるべきと認識されていることが分かった。

②合同カンファレンスの実際
氏田1)は「全員が意見を出し合いより良い対応はどうすべきかを話し合う場であるカンファレンスは欠くことのできない方策である」と述べており、表1のアンケート結果でも、ほとどの項目に対しても90%以上が必要と思う・やや必要と思うであった。
しかし、合同カンファレンスが必要と感じてはいるが、合同カンファレンスに参加していながらも、問8の要望

内容より他職種を含めた話し合いがなされにくい環境であることが分かった。これらのことより、ほとんどのスタッフはカンファレンスの開催を望んでおり、各職種の専門性に活かしたいということが問8の結果から明らかになった。一方で表1の④⑨⑩の3項目については「必要と思う」「やや必要と思う」が90%以下であった。理由として④⑨は対象職種の割合に偏りがあるためと考えられる。また、⑩に関してはカンファレンスの定例開催が機能評価上の必要項目であることが周知されていなかったためと思われる。

③合同カンファレンスに対する認識の温度差

現合同カンファレンスのスタイルは、医師の進行で行われている。表1から、ほぼ、どの項目においても、90%以上を占めていることから、合同カンファレンスを開催することで治療に対する情報共有や、患者を他職種間でトータルに理解したいと考えていることが明らかになった。

しかし、患者は自分の真意を医師にはなかなか伝えられず、看護師や他職種に話すことがしばしばある。その患者の思いを、職種間で共有することは、患者にとって有益となるケアや提案がいくつも生まれる場面でもある。

問8のインタビュー結果から、職種間に治療方針が伝わっているが、患者紹介に留まっているケースが少なからずあることも分かった。限られた時間の中で行われる現行の合同カンファレンスで、全ての職種がその提案を寄せられなかったり、発言のチャンスを待っていることも把握できた。

一方、進行を務めている医師からは、現合同カンファレンスにマンネリさを感じているという意見や、業務に追われてカンファレンスの時間を満足に取れない事が多いという意見がありながら、カンファレンスの内容には満足しているという結果もあり、そこに温度差を感じた。

小澤 2)は「患者と家族の希望が確認された時、チーム内では答えが幾通りもありえる状況が起こる。患者が望むことを中心にケアを展開するのが医療の基本である。」「一人一人の参加意識と、アセスメントがチームの方針として積極的に採用されることが良質のケアを展開する上で大切である」と述べており更に小澤は「チーム医療の形成の原則に情報の共有と、合意の形成、医療者としての資質」も挙げている。

私たち医療者は専門性をもって、患者を「疾患を持って人生を歩んでいる生活者」として理解し、患者や家族の希望することを中心に、それぞれが、何が必要なのかをアセスメントしながら、最もよい方策を打ち出していく必要があると思われる。

IV 結論

- ①合同カンファレンスは、過去の文献や当研究からも有用といえる。
- ②合同カンファレンスは必要と思っているが、現行の合同カンファの情報共有について、検討する余地がある。

③アンケート・インタビューの結果より、合同カンファレンスに感じられている温度差が課題として浮き彫りとなった。先行文献にもあるように、合同カンファレンスは患者を総合的に捉え、現在・今後を考える道具として欠くことのできないものである。しかし、患者にとって有益となる合同カンファレンスを行うためには、定期的な開催はもちろんのこと、各職種が目的をもって合同カンファレンスに参加することが大前提とされる。医師が感じているマンネリさはスタッフが発言しやすい環境作りや、情報共有の仕方を工夫することで解消されることかもしれない。今後の課題として考慮すべき点と考える。それを克服することで、カンファレンスの有用性は非常に高く、継続する意義は十分にあると思われる。

V 謝辞

今回の研究において研究の目的からアンケート作成に至るまでご指導下さいました、北海道医療大学・笹木先生、アンケート調査及びインタビュー調査に快くご賛同下さいました医師始めコメディカルの皆様方には研究スタッフ一同心より感謝いたします。

引用文献

- 1) 氏田 美知子：カンファレンス活性化への工夫、看護実践の化学, 6, P41, 2000.
- 2) 小澤 竹俊：チーム医療と求められる資質 愛がなければすべては負に作用する, 月刊ナーシング, 21 (1), P37, 2001.

参考文献

- 1) 柳川 のり子：呼吸器内科のカンファレンスの取り組み、看護実践の科学, 2008.
- 2) 杉本 元子：看護を語り、調整の場としてのカンファレンスへ、看護実践の科学, 2008.
- 3) 河村 公子他：呼吸器・消化器外科病棟における看護師と他職種との連携から見た合同カンファレンスの意義, 大阪大学, 看護学雑誌, 2007.
- 4) 米倉 さつみ他：カンファレンスを行うための司会進行の検討—合同ケースカンファレンスの意識調査・実態調査を通して—, 37 回看護総合, 2006.
- 5) 高山 絵里子他：患者中心の医療を考えたコメディカルとの連携—情報シートを活用したカンファレンスの効果—, 第 38 回看護総合, 2007.
- 6) 高村 きのみ：ターミナルケアにおけるカンファレンス—ターミナル患者の看護を通してのカンファレンスを振り返って—, 看護実践の科学, 6, 1992.
- 7) 吉田 智美：患者の全体像把握と資源の有効利用, NursingToday, 4, 1997.